

第36回 福井県発掘調査報告会資料

— 令和2年度に発掘調査された遺跡 —



2021

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

目 次

1. <small>せいまいせき</small> 清間遺跡	2	9. <small>くつみいせき</small> 沓見遺跡	20
2. <small>ながさきいせき</small> 長崎遺跡	4	10. <small>くもんみょうまつのきかいどういせき</small> 公文名松ノ木街道遺跡	22
3. <small>ろくろせやまこふんぐん</small> 六呂瀬山古墳群	8	11. <small>こぜんないせき</small> 高善庵遺跡	24
4. <small>かつやまじょうあと ふくろだいせき</small> 勝山城跡・袋田遺跡	10	12. <small>にしづかこふん</small> 西塚古墳	26
5. <small>かみこぎたえはらまちいせき</small> 上河北江原町遺跡	12	13. <small>は が じ</small> 羽賀寺	28
6. <small>いちじょうだにあさくらしいせき</small> 一乗谷朝倉氏遺跡	14	14. <small>おはまじょうあと</small> 小浜城跡	30
7. <small>ふくいじょうあと</small> 福井城跡	18	15. <small>にしまじょうあと</small> 石山城跡	34
8. <small>ふくいじょうあと</small> 福井城跡	19		

令和2年度に福井県内で行われた発掘調査の概要

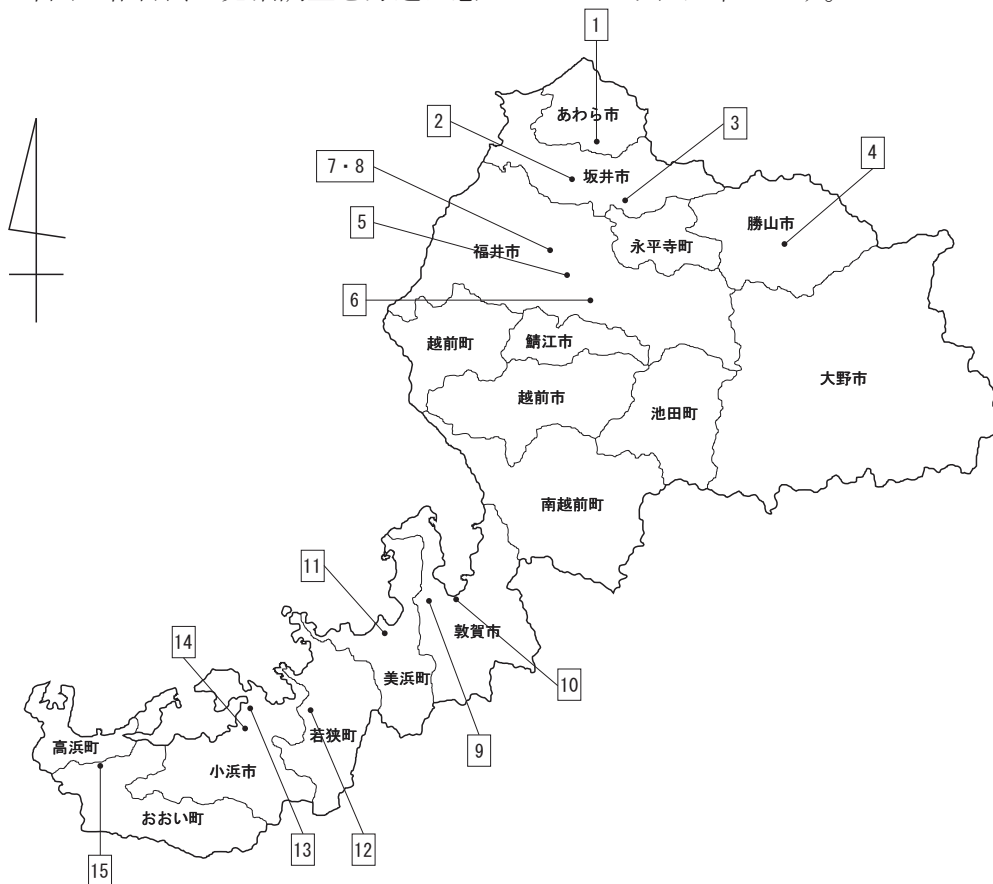
令和2年度に行われた発掘調査は、県事業が7件、市町事業が8件の計15件でした。

嶺北地方では、坂井市長崎遺跡と勝山市勝山城跡・袋田遺跡の調査成果が注目されます。

称念寺周辺の長崎遺跡では、室町時代後期から江戸時代前期頃の区画溝や道路、屋敷跡が確認されています。商いに用いられる竈秤きおびかりのほか、茶道具の瓦質風炉がしつぷろが多く出土し、当時栄えた街並みの様相が明らかになりつつあります。勝山城跡・袋田遺跡では河原石を用いた多くの井戸や石積遺構が確認されたほか、勝山市域で初めて笏谷石製の平瓦つげふだもつかんや付札木簡が出土しました。石を用いる遺構の多さから、勝山における石の文化がうかがえます。

嶺南地方では敦賀市沓見遺跡の調査で、平野西部の弥生時代から古墳時代の様相が明らかにされました。古墳時代中期の須恵器は、大阪の陶邑古窯跡群などで生産され運ばれた可能性があります。また西塚古墳では、北陸地方最古級の人物埴輪や馬形埴輪が出土しており、注目されます。古代の遺跡は公文名松ノ木海道遺跡が注目されます。9棟の建物のなかの竪穴式住居からは、祭祀さいしに用いられたと思われる赤彩土師器せきさいいほじきが出土しました。このほかにも、円面硯えんめんけんや転用硯てんようけん、刀子や砥石や鉄滓など鍛冶工房に関する遺物がみられるため、鍛冶工房とそれに伴う公的施設であると思われます。

以上のように、令和2年度も、県内各所で発掘調査が行われており、多くの成果が得られました。今回の報告会で発掘調査を身近に感じていただければ幸いです。



令和2年度県内発掘調査地点（目次番号と同じ）

せいまいせき
1. 清間遺跡

所在地：あわら市清間 20 字中館 24 番ほか
調査原因：新工場建設に伴う調整池等付随設備造成
調査期間：令和 2 年 10 月 5 日～ 11 月 19 日
調査主体：あわら市教育委員会
調査面積：925 m²
時代：弥生時代、古代、中世



位置図 (S=1/50,000)

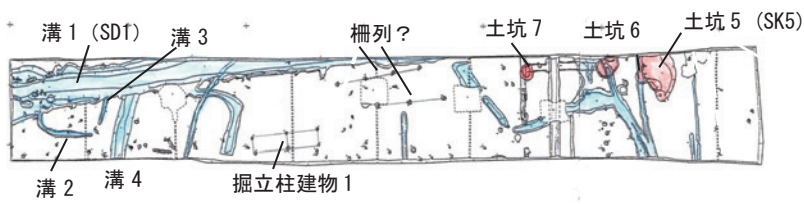
調査の概要 遺跡は、竹田川左岸の自然堤防上にあり、今回の調査地点は、新工場建設に伴い、令和元年度に実施した調査地に接する南西となります。東側の排水処理槽部分と西側の調整池部分で、工事開始時期が異なるため、2区に分けて調査を行いました。最終的な調査面積は、排水処理槽部分が東西約 29.8m、南北約 13.0m で計約 384 m²、調整池部分が東西約 63.0m、南北約 8.6m で計約 541 m²です。

遺構 排水処理槽部分から、土坑 (SK) 4基、柱穴・小穴 (SP) 34基を確認しました。土坑 (SK) 1は径約 1.2mの円形で、西側半分のみ掘ったところ、確認した高さから約 0.5m 下層で多数の土師質皿を重ねた状態で検出しました。土師皿取り上げ後の深さ約 0.8m までの掘削にとどまりましたが、中世の素掘り井戸と思われます。

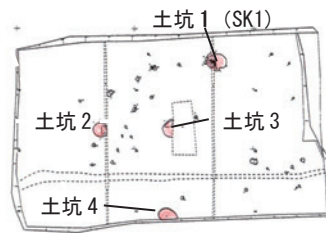
調整池部分は、土坑 6基、柱穴・小穴 116基、溝 (SD) 22条を検出しました。柱穴には、2間×1間の掘立柱建物 1棟、柵列と思われるもの 2列を含みます。東西方向からやや傾いた直線状の溝 (SD) 1は、上部幅約 2.0m、底部幅約 1.0m、深さ約 0.4mの古代の溝でした。屈曲する溝 2は、北側が溝 1に切断されて確認できないため、それよりも古い時期となります。排水処理槽に近い箇所で検出した土坑 5・6は、重機での掘削時から炭混じりの黒色土に中世の土師質皿などが多数含まれていました。しかし、北側が調査区外となるため、全形は未確認で土坑の性格も明らかにできませんでした。

遺物 洗浄途中ですが、中世の土師質皿が大多数を占め、その殆どが土坑 1・5・6から出土しています。溝 1は、古代の須恵器の出土が多く、土師質土器、越前焼、弥生土器・石器、管状土錘等も少量含みます。特に注目すべき遺物に古代の墨書土器と製塩土器の一種と思われる土製支脚各 1点があります。溝 2では、北側肩部から弥生時代後期のほぼ完全な胴部に穿孔された壺形土器 1点が横倒しの状態で出土しています。

まとめ 調査地は、井戸と考えられる土坑等から、中世に最も栄えていたようです。溝 2出土の胴部穿孔の壺形土器は、煮炊きには使えず、墓や祭祀に伴うことが多いため、溝 2は溝 3とともに弥生時代後期の方形周溝墓の周溝の可能性があります。溝 1に含まれていた遺物から、11世紀には溝が使用されなくなって埋もれたと思われますが、以前には周辺に文字を知る人が居住し、塩づくりの最終工程が行われていた可能性も考えられます。(橋本幸久)



調整池部分調査区



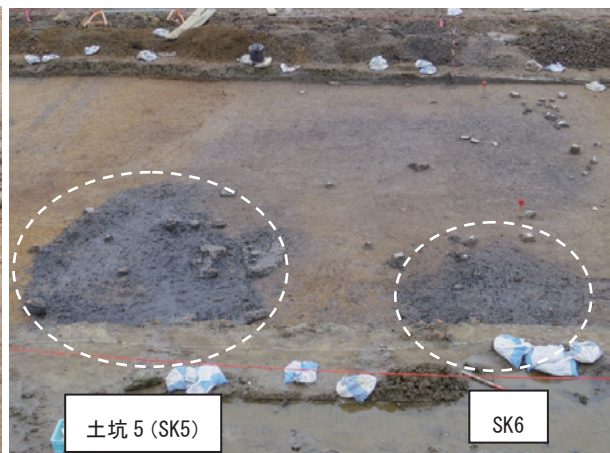
排水処理槽部分調査区



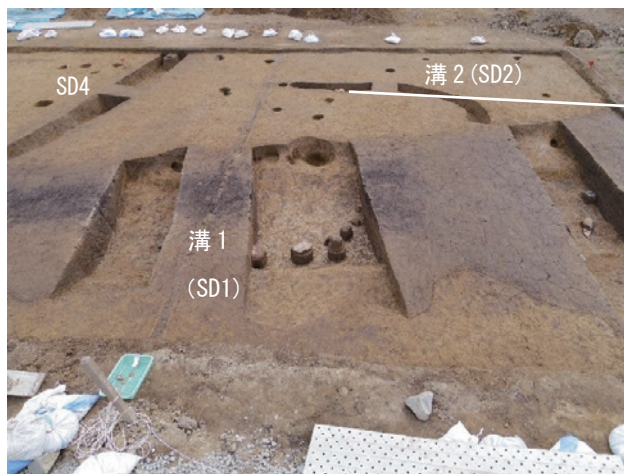
清間遺跡両調査区遺構図 (上)、合成俯瞰全景 (下：北方上空から)



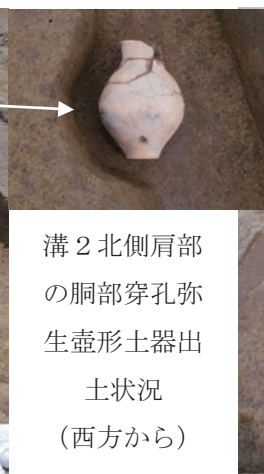
土坑 1 西半部、土師質皿の検出状況 (西方から)



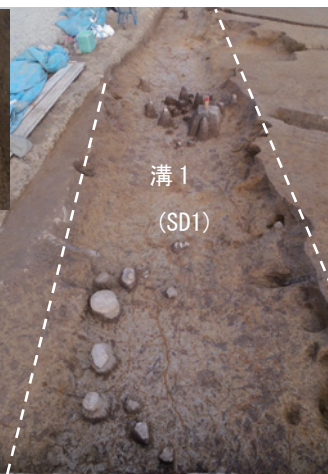
調整池調査区土坑 5・6 検出状況 (北方から)



調整池調査区西端溝 1、一部掘削状況 (北方から)



溝 2 北側肩部の胴部穿孔弥生壺形土器出土状況 (西方から)



溝 1 遺物出土状況 (西方から)

ながさきいせき 2. 長崎遺跡 (3～5区)

所在地：福井県坂井市丸岡町長崎

調査原因：福井港丸岡インター連絡道路改良事業

調査期間：令和2年5月1日～11月30日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：3区 3,940 m²

：4・5区 1,060 m²

時代：古墳時代前期、古代（奈良・平安時代）

中世（鎌倉・室町時代）、近世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 長崎遺跡は、坂井平野南東部、旧北陸道沿いの交通の要衝に立地します。中核の称念寺(長崎城跡)を中心に、鎌倉時代後期から室町時代中期にかけて寺内町が形成され、地域の商品流通の拠点となった遺跡です。称念寺は、鎌倉時代後期の正応3(1290)年以前から存在した寺院が時宗に改宗し、伽藍が大きくなったと伝わります。商業を盛んに行い、豊富な財力を基盤に室町時代(15世紀中葉)には、将軍足利義政や後土御門天皇の祈願所としての地位を授かり繁栄します。しかし文明3(1471)年、戦乱による突然の火災から、長崎と称念寺は焼土と化しました。16世紀になると、朝倉氏が長崎を戦略上の拠点に使うこともあり、町は再整備されたと考えられます。また、称念寺は朝倉氏により寺領が安堵され、江戸時代にかけて再び発展していきます。

発掘調査は、道路改良事業に伴い令和元年(2019)度から称念寺の南側の場所で実施しています。令和2年度の調査は、調査対象地の西半の3区と、東半の4・5区を行いました。

【3区】

遺構 古墳時代前期の溝1条のほかは、中・近世(鎌倉時代後期から江戸時代前期)の遺構です。3区の西側に、中世長崎の町を区画する堀があり、堀の東側に、屋敷境の区画溝8条以上、掘立柱建物6棟以上、井戸13基、溜枡2基など、多くの遺構があります。3区の中央付近に、南北から東西方向に折れて進む幅7～8mの道路があり、道路上には、15世紀後半の火災によって生じた炭化物が広がり、火事場の廃材を捨てた穴も見つかりました。道路を境に、東と西では屋敷地が大きく変わります。西側の屋敷は、南北約30m、東西約10～20mの広さで、北側に中心的な掘立柱建物2棟と井戸・池がそれぞれ1基、南側に離散的な掘立柱建物1棟と池1基が配置されます<写真5>。建物は何度も建替えされながら存続し、室町時代中期から江戸時代前期(15世紀～17世紀)にかけての屋敷と推定されます。東側の屋敷は、かぎ折れの区画溝が多重に巡る形をなし、東西60m以上の敷地をもつ大きな屋敷の一部と考えられます<写真1>。3区東端には、掘立柱建物2棟と井戸5基があり、小規模な屋敷もあります。井戸のうち3基は素掘りで、残る2基は石組みの井戸です。出土遺物から、石組みの井戸は火災後の16～17世紀、素掘りの井戸は火災以前の14～15世紀に推定できます。

遺物 古代の須恵器・土師器が出土し、なかには赤彩された土師器の坏で古代寺院や役所

クラスの遺跡から出土する特殊な土器もみられました。

中・近世の遺物は、中国製の青磁碗・皿、白磁坏・皿、青白磁梅瓶、天目茶碗、瀬戸美濃焼の灰釉碗・鉢・卸皿、鉄釉壺・天目茶碗、珠洲焼壺、越前焼甕・壺・播鉢、瓦質土器風炉・火鉢・播鉢、土師質土器皿(かわらけ)、唐津焼、漆器碗、曲物、櫛状木製品<写真2>、下駄、漆塗糸巻きされた工具の柄、金属製分銅<写真6>、鈴<写真7>、飾金具、銅銭、硯、砥石などです。出土遺物の年代は14～17世紀と幅があるなか、15世紀のものが大半を占めます。これは不意の火災に遭い、所持品が持ち出せなかったためと考えられます。瓦質土器の風炉という茶会で使われる移動式のコンロや、青磁や灰釉の碗、天目茶碗の多さが特筆されます。金属製の分銅は、主に商いに使用される竿秤のおもりで、壺形をなし、高さ3.0cm、幅2.3cm、重さ65.4gを計測します。火事場整理の穴から出土しました。

【4・5区】

遺構 4区は、主に道路北側の側溝工事をする箇所を細長く調査しました。4区の中央付近にて、河川を検出しました。この川を境に東側は、地籍図や平成28年度の調査結果から低湿地と推定され、遺構は確認できませんでした。これに対し川の西側では、主に室町時代の溝8条、土坑3基、集石1基、杭列1基、柱穴多数など多くの遺構が見つかりました。この河川をもって称念寺を中心とする寺内町の東側の境になると考えます。

5区は、道路予定地の南側を調査しました。4区で見つかった河川が、5区では調査区の西端に延びていました。4区と同様に、川より東側には明確な遺構はありません。この川は、近世以後にほぼ全体が埋め立てられ、細い水路のみ近・現代まで残ります。川の西岸(町側の岸)は、15世紀後半に起きた火災後に、炭や廃材を含む土砂によって埋め立てられ、16世紀代の川の西岸を検出しました。川と同時期の区画溝が川の約5m西側で止まり、そこから川にかけて、胴木の上に木樋を配した木組遺構(暗渠)が見つかりました<写真8・9>。木樋は、推定長5.4m、幅約25cmを計り、この上に土塁が築かれた可能性が考えられます。

遺物 4区の主な遺物としては、中国製陶磁器、瓦質土器のほか、漆器<写真11>、宝篋印塔、建築部材、大型の釘、壁土などがあげられます。

5区の主な遺物としては、15世紀代の川底から出土した青磁碗<写真10>、上層から出土した永禄元(1558)年と記された一石五輪塔などがあります。

まとめ

3区の掘から4・5区の河川にかけて、室町時代中期から江戸時代前期(15～17世紀)の、区画溝、道路、屋敷が整然と配置される様子が明らかになりました。遺物では、多様な産地の陶磁器や、15世紀に茶道具として流行した瓦質土器の風炉が豊富に出土し、商いに使われる竿秤の分銅も見つかりました。これらの成果から、中世の長崎では、商業活動を盛んに行った称念寺を中心に、文化的に高い暮らしを行う住人が屋敷を構え、多くの人や物が集まる地域経済の拠点となる町が発展したことが想定されます。(櫛部正典)



写真1 長崎遺跡3区全景（東から）



写真2 櫛状木製品と曲物



写真3 木桶の井戸



写真4 瓦質土器風炉



写真5 西側の屋敷付近の遺構配置状況



写真6 分銅



写真7 鈴

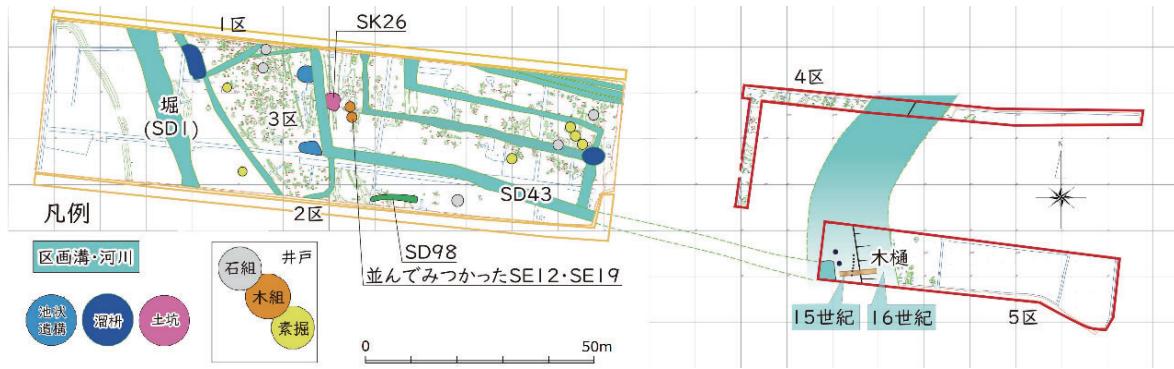


図1 長崎遺跡3～5区の遺構概要図



写真8 木組の暗渠（西から）



写真10 5区出土青磁碗



写真11 4区出土漆器



写真9 木組の暗渠（東から）

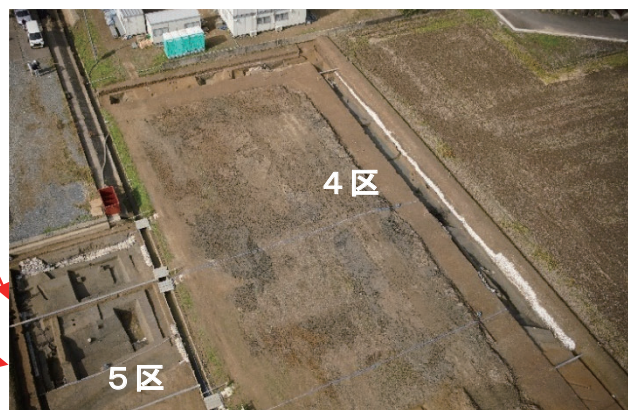


写真12 長崎遺跡4・5区（東から）



写真13 長崎遺跡3区遠景（西から）

ろくろせやまこふんぐん 3. 六呂瀬山古墳群

所在地：坂井市丸岡町上久米田

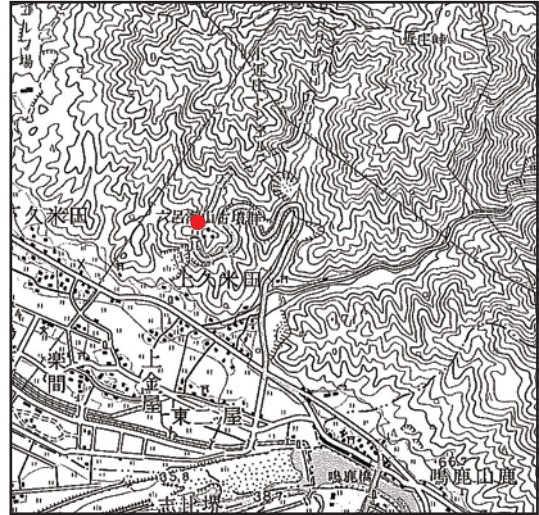
調査原因：史跡整備に向けた範囲確認

調査期間：令和2年11月4日～12月7日

調査主体：坂井市教育委員会

調査面積：約56 m²

時代：古墳



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 六呂瀬山古墳群は、北陸最大級とされる全長約140mの規模をもつ1号墳（前方後円墳）を含む4基で構成される前期古墳群です。古墳時代の越前地域を知るうえで、重要な遺跡と評価され、平成4年に国指定史跡となりました。

遺構 調査対象となった六呂瀬山1号墳は、標高約200mの山頂に立地しており、自然の尾根を利用して築造されています。今回の調査では、測量図面で良好にテラス部と確認できる西側と北側で、葺石や埴輪列の有無を確認しました。それぞれ、西側トレンチと北側トレンチと呼びます。

西側トレンチの上段テラス部では、約10～15cmの手のひらサイズの葺石を多く確認しました。角が取れ、丸みを帯びていることから、川原石と考えられます。しかし、下段斜面からは葺石は確認できませんでした。六呂瀬山1号墳の後円部斜面は、傾斜が急なため、様々な要因で葺石が転落したものと考えられます。また、墳丘裾部では、基底石と考えられる約40cmの川原石を確認しました。この基底石は、昭和60年代の調査で、確認された時と同じ状態で出土しました。

北側トレンチでは、約20～30cmの大きめな葺石が確認されました。北側トレンチで確認された葺石は、以前、六呂瀬山3号墳を調査した際に確認された、約20～30cmの葺石とほぼ同じ大きさということが分かりました。

遺物 西側トレンチでは、多くの埴輪片や高坏の脚部が出土しました。特に上段テラス付近では、家形埴輪や円形埴輪、ほぼ据えられた状態の円筒埴輪基部部等を確認しました。

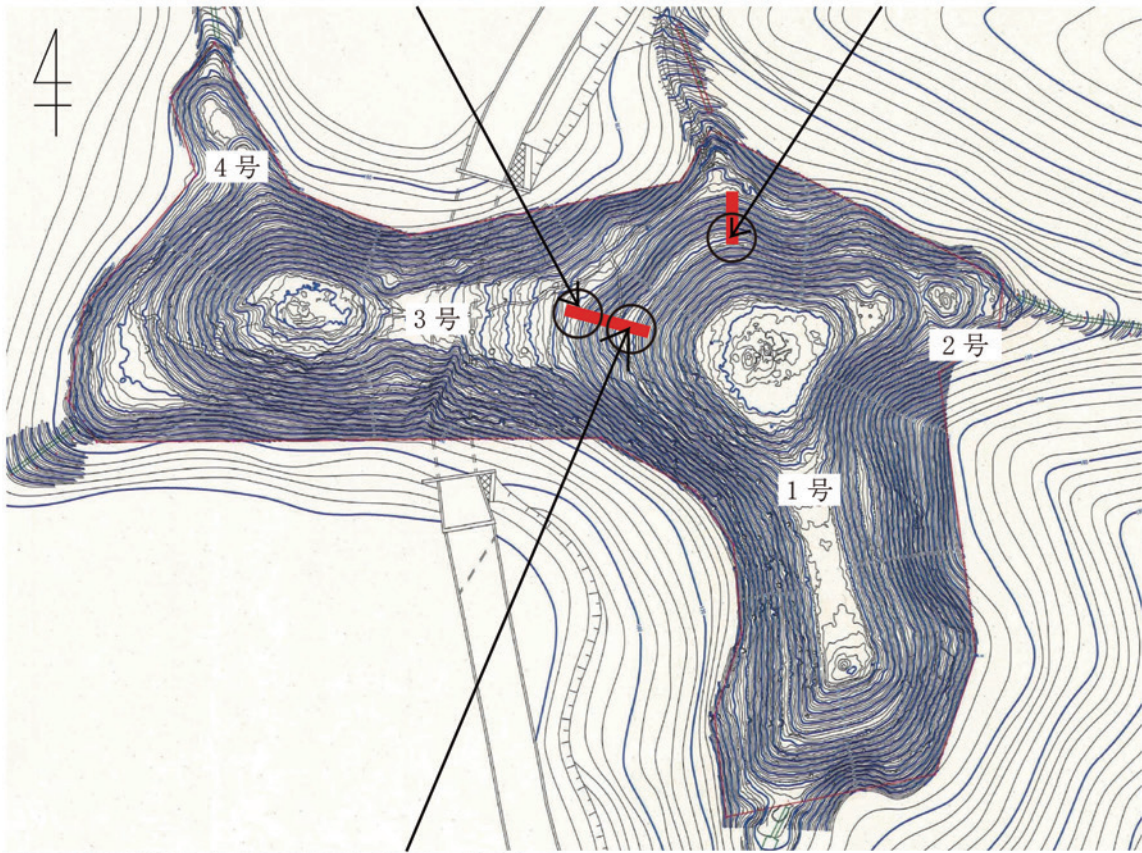
まとめ 今回の調査では、2つの調査区で葺石を確認することができました。葺石の多くは、転落しており、築造当時のまま残っているものはあまりありませんでした。しかし、六呂瀬山1号墳の後円部では、2種類の大きさの違う葺石が使われていたことが明らかになりました。また、西側トレンチでは、上段テラス部で円筒埴輪の基部部を確認しました。今後、検討が必要ですが、六呂瀬山1号墳の上段テラス部に、円筒埴輪が並べられていたと推察されます。さらに、上段テラスでは、円形埴輪等の形象埴輪片の出土も確認できました。円形埴輪は家形埴輪などと一緒に、儀礼祭祀をする場所に据えられることから、西側上段テラスで儀礼祭祀を行っていた可能性が考えられます。
(小林 美土里)



西側トレンチ 基底石出土状況



北側トレンチ 完掘状況 (上段テラス)



円筒埴輪



圀形埴輪

代表的な出土遺物 (西側上段テラスより出土)

かつやまじょうあと ふくろだいせき 4. 勝山城跡・袋田遺跡

所在地：勝山市本町3丁目

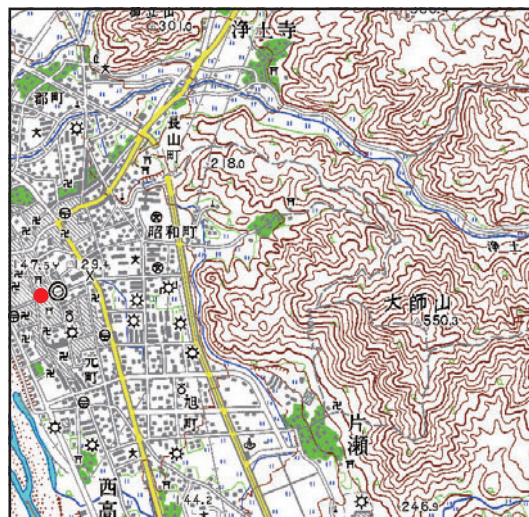
調査原因：一級河川大蓮寺川改修事業

調査期間：令和2年5月1日～令和2年10月31日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：996 m²

時代：弥生・平安・中世・近世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 勝山城跡・袋田遺跡は、九頭竜川右岸の河岸段丘上に所在します。令和2年度は、令和元年度の2つの調査区に挟まれた部分を3分割して発掘調査を実施しました。本町通りの東側を3-1区、西側を3-2区、3-2区の西側を4区と呼称し、3-1区と3-2区、4区東端では2面、4区中央から西側部分で4面の遺構確認面を検出しました。

遺構 3-1区では、石組井戸7基、素掘り井戸1基、石積遺構5基、溝1条のほか、土坑や小穴約120基、石列などを検出しました。石積遺構4基は地面を四角く掘り込んだ四方の壁に河原石を3～6段積み上げるもので、年間を通じて一定である地下の温度を利用した食料などの貯蔵施設と考えられます。また調査区東側では、軟らかい地盤を強化するため、多数の川原石を使って地盤改良工事を行った跡が認められました。

3-2区は100 m²に満たない小さな調査区ですが、遺構密度が非常に高く、石組井戸2基、土坑や小穴約90基などを検出しました。小穴のなかには柱痕が認められるものもあり、沈下を防ぐため柱痕の底部に地山の石が当たるようにする工夫もみられました。

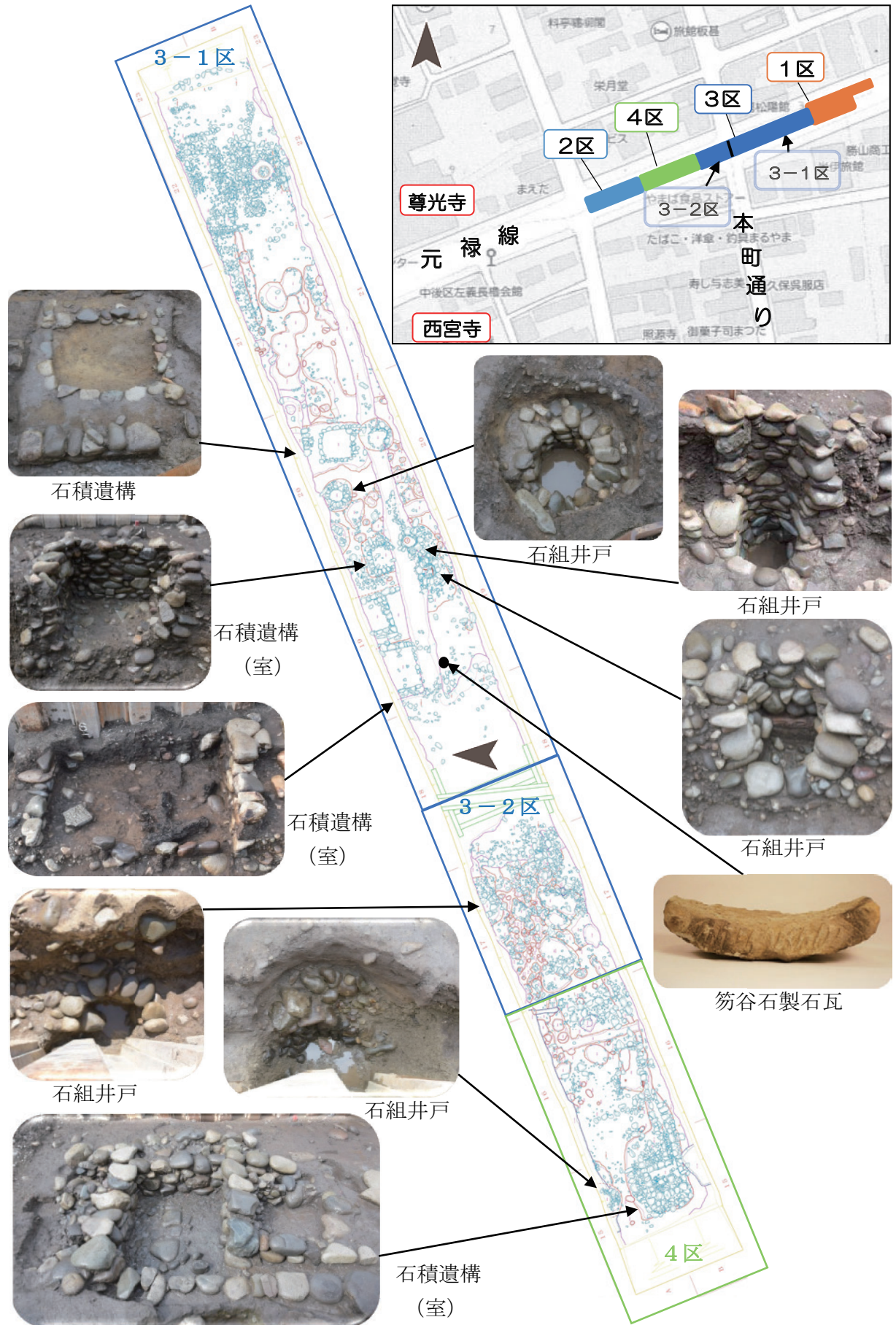
4区では、石組井戸3基、石積遺構3基、溝4条、自然流路2条、土坑や小穴約180基、石列などを確認しました。西端にある石積遺構の南東角からは石組の溝が東西方向にのびており、その傾斜から水が溝から石積遺構に流れ込むようになっていたと考えられます。また、小穴のなかには、柱根が残るもの7基や、根石があるもの2基などが認められました。

遺物 今回の調査では勝山市域で初めて出土したものが2つありました。それは笏谷石製の石瓦と付札木簡です。石瓦は城郭の主要な建造物にのみ葺かれた特殊な遺物であり、その出自が注目されます。また木簡は「六百入」と判読でき、品物の数を示すと推測されます。

遺物は、かわらけや青磁・染付・唐津・瀬戸美濃・越前焼などの陶磁器類が大半ですが、4区では平安時代の須恵器や弥生土器片がわずかに出土しています。このほか、角間石、石臼・バンドコなどの石製品、釘や銭貨などの金属製品、胴木などの木製品もみられました。

まとめ 1面目では近世の勝山城下町の町屋、2・3面目では中世の袋田村、4面目では平安時代以前の集落に伴う遺構・遺物を検出しました。特に、川原石を多く使った遺構(井戸や石積遺構など)が目立つことが特徴としてあげられ、勝山における石の文化の奥深さが感じられる調査となりました。

(藤本聡子)



かみこぎたえはらまちいせき
5. 上河北江原町遺跡

所在地：上河北江原町遺跡

調査原因：一般県道徳光福井線道路改良工事

調査期間：令和2年5月1日～9月30日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：1,700 m²

時代：弥生・古墳時代



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 上河北江原町遺跡は、福井平野の東南部、上河北の集落とその西側に広がる遺跡です。遺跡の範囲内で一般県道徳光福井線道路改良工事が行われることになったため、令和元年度から令和2年度にかけて発掘調査を行いました。

遺構 掘立柱建物の跡・方形周溝墓（弥生時代のお墓。溝を四角く巡らしたもの）・溝・土坑・ピットを見つけました。調査区北側に自然河川が存在します。その南側に掘立柱建物跡を含むピット群が密集します。さらにその南側では、やや遺構密度の少ない部分を挟み方形周溝墓1基が存在します。その南側には自然河川が存在し、その自然河川の南側に方形周溝墓1基と溝が分布します。

主な遺構である掘立柱建物跡はその周辺や柱穴からの出土土器から弥生時代後期を中心とした時期のものと考えられます。方形周溝墓は2基見つかりました。1基は出土土器から弥生時代中期に属するものと考えられます。もう1基の時期は不明です。自然河川は、調査区北側と中央付近に認められます。自然河川からは弥生土器が見つっています。そのことから、遺跡の存続時期をとおして存在したことがわかります。自然河川にはほぼ併行する溝を数条確認しています。それらは、集落の区画溝として機能していたものと考えられます。

遺物 弥生土器・土師器・須恵器などを見つけました。それらは、弥生時代から古墳時代にかけての時代のものです。

まとめ 上河北江原町遺跡は、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての集落跡であることが明らかになりました。建物とお墓が明確に場所を違って配置されていますので、区画意識が読み取れます。掘立柱建物跡は、重複しているものがありますので、短期的な集落ではなく、ある程度の時期にわたって営まれた集落であったことがわかります。（白川 綾）



調査区南側全景 南から



柱痕・礎板出土状況 東から



掘建柱建物跡検出状況 西から



土坑遺物出土状況 南から



方形周溝墓完掘状況 西から



溝遺物出土状況 西から



溝遺物出土状況 西から



溝遺物出土状況 西から

いちじょうだにあさくらしいせき
6. 一乗谷朝倉氏遺跡 (第153次)

所在地：福井市城戸ノ内町

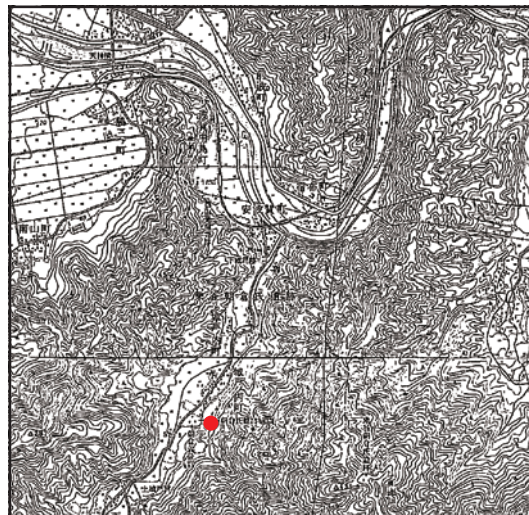
調査原因：史跡整備

調査期間：令和2年9月1日～10月28日

調査主体：一乗谷朝倉氏遺跡資料館

調査面積：50 m²

時代：室町時代



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 令和2年度は崩落の危険度が高い朝倉館背後の土塁や斜面について、令和3年度以降に予定している整備工事のため、戦国期遺構の状況を把握し、工事実施設計に当たって遺構の保護を図る目的で発掘調査を行いました。対象地はいずれも字水谷地籍で、北から対象地①～③としました。表面観察から遺構の残存状況が良好と判断される箇所計5本のトレンチを設定しました(図1)。

対象地①は朝倉館後背を区画する北東角から南へ延びる土塁部分です。朝倉館後背の土塁に調査を行うのは初めてです。土塁に伴う空濠は、近接する南陽寺から英林塚(英林孝景墓所)への遊歩道として整備されています。整備が行われたのが調査体制が整う前の古い時期のため、発掘調査は行われていません。本来であれば土塁と空濠を一体で調査する必要がありますが、遊歩道を破壊することは不可能なため、空濠については調査を行っていません。対象地②は朝倉館跡庭園に導水するための貯水池の南に広がる斜面部分です。近年崩落が激しく、原因を特定する必要性がありました。対象地③は館後背の南東角、通称観音山と呼称される部分です。目の前に先ほど紹介した英林塚が位置しています。この対象地では、見た目にも土塁の幅など、対象地①の土塁とは構造が異なることが予想されました。

対象地は崩落の危険度が高いと紹介しましたが、どの箇所も急傾斜で高さがあるため、調査は危険で困難でした。以下、対象地ごとに遺構・遺物を報告します。

対象地①

遺構 第1トレンチは土塁の北東角部分で、空濠から最も高低差があります。上部では表土は薄く、濠底に近い裾部では破碎された風化礫を含む流土が分厚く堆積していました。土塁が構築される前の山肌である旧表土は確認できず、風化礫岩盤層の地山の上に破碎された風化礫を含む盛土で土塁が構築されていることが判明しました。土塁の最大傾斜角は60度となっています。トレンチ下端では、岩盤が水平に加工されており、一部ではありますが濠底と考えられる部分を確認しました(写真2)。第1・2トレンチで共通して確認できており、濠底は水平と推定できます。空濠の形状は箱堀で、遊歩道はこれをそのまま利用しているようです。第3トレンチでは、破碎された風化礫を含む盛土層と岩盤層の間に、黒く濁った旧表土を確認しました(写真1)。第1・2トレンチ側では表土を完全に掘削し、第3トレンチ

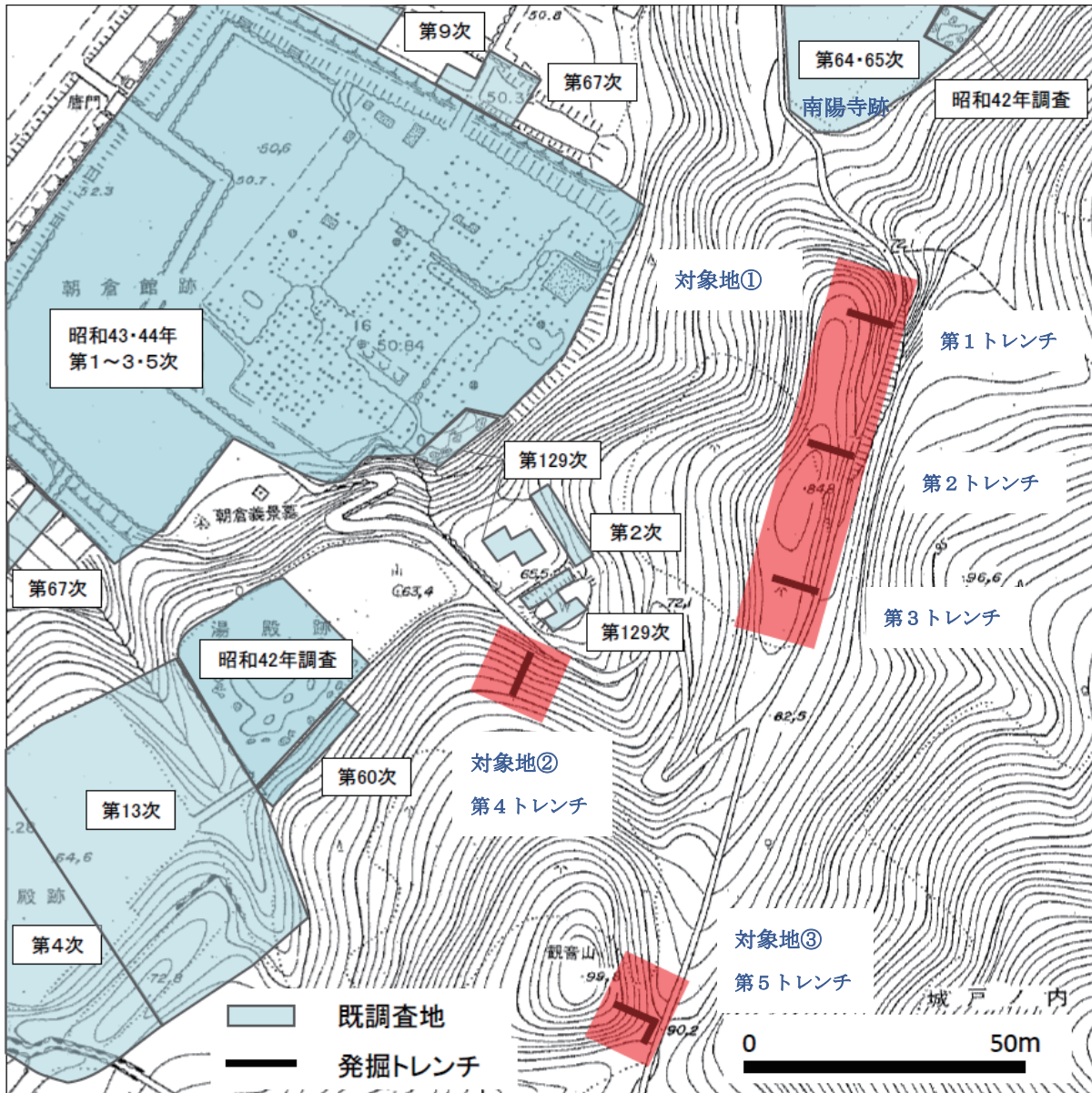


図1 令和2年度発掘調査地位置図（赤枠が対象地 黒色がトレンチ）

側では表土を掘り残したものと推定できます。第1トレンチでは空濠裾から頂部までの高さは残存値で約7mありますが、第3トレンチでは約5mと低くなっています。第1トレンチでは盛土が流出しており、本来もっと高かったと推定できます。対象地①では各所で崩落が確認できますが、この盛土が崩落していることが確認できました。崩落の原因は竹の根からの浸食や一部モグラの活動が原因と判断できました。

遺物 対象地①の3つのトレンチからは遺物は確認できませんでした。土塁上に施設が存在しないため、こうした結果になったと推定できます。

対象地②

遺構 第4トレンチは、湯殿跡庭園に近接する貯水池南側の斜面です。元の地形より急勾配に掘削されている箇所と考えられます。表土下には上部で黒ボク層の堆積が、下部で岩盤層が確認できましたが、盛土や遺構は確認できませんでした。下部の岩盤層では、ミミズを追ってモグラが激しく活動しており、硬い岩盤層をもモグラが侵食していることが判明しました。これにより柔らかくなった表土が、雨や雪の影響で崩落している様です。

遺物 室町時代のかわけ片が数点出土しました。観音山の頂部に向かって平坦面が複数存在するため、その範囲からの転落品と考えられます。

対象地③

遺構 第5トレンチは通称観音山の頂部に近い土塁斜面に設定しました。傾斜が急なため、上部の表土は薄く、裾部には崩落土が分厚く堆積していました。表土下に盛土は確認できませんでした(写真4)。元々東側から張り出していた尾根の馬の背状の部分を掘削して土塁と濠としたものと推定できます。濠底には土塁状の高まりが存在したため、南側にL字状にトレンチを拡張し確認を行いました。結果、石列が認められ、石積みを伴う低土塁により空濠が仕切られていたことが判明しました(写真3)。館後背への水の流れ込みを防ぐなどの機能が推定できますが、今回は部分的な調査のため、今後総合的に調査を行う必要性があります。

今回の調査目的とは異なるため発掘は行っていませんが、対象地③の頂部には広範囲に平坦面が構築されており、この部分は盛土造成されているものと推定できます。また、頂部平坦面には南北11.0m、東西7.2m規模の基壇が現存し、礎石が認められることから、「観音山」の名前の通り堂跡と推定されます。朝倉氏は初代英林孝景以降、京都清水寺の千手観音信仰が篤く、清水寺には今も朝倉堂があるほどです。この堂跡の眼前に英林塚が位置することもこれに深く関係するものと考えられ、今後の調査・研究に注意を要します。

遺物 室町時代のかわけ片が裾部の堆積土から出土しました。頂部からの転落品と考えられます。ただしその量は極めて少なく、恒常的な生活空間ではないことを示していると考えます。

まとめ 対象地①では、盛土で構築された土塁の基礎的なデータを把握することができました。最大傾斜角は60度、残存高約7mです。盛土の流出を考慮すると推定で元の高さは8mほどであった可能性があります。

対象地②では、モグラが崩落に大きな影響を与えていることが判明しました。遺跡の保存を図るために、その対策を考えていかなければなりません。対象地③では自然地形を利用して館南東角の区画が構築されていること、また、空濠内に低土塁が構築されているなど新発見を得ることができました。

対象地③の頂部平坦面は、対岸にある復原町並を一望できる非常に見晴らしがよいところです。一乗谷川右岸の最高高度を誇る朝倉館の南東角に、物見櫓ではなく観音堂と推定できる堂跡が存在することは、当時の朝倉氏の思想をよく表しているのではないかと考えます。今回の調査面積は狭小なものですが、新たに検討すべき課題も多く、今後の遺跡の保存・活用につなげていきたいと思えます。

(宮崎 認)



写真1 第3トレンチ全景（東から）



写真2 第2トレンチ裾の様子（北から）



写真3 第5トレンチ濠内低土塁（南から）



写真3→

写真4 第5トレンチ全景（東から）

7. 福井城跡

所在地：福井市中央1丁目3番地
調査原因：市街地再開発事業
調査期間：令和3年2月8日～3年2月17日
調査主体：福井市教育委員会
調査面積：200 m²
時代：近世

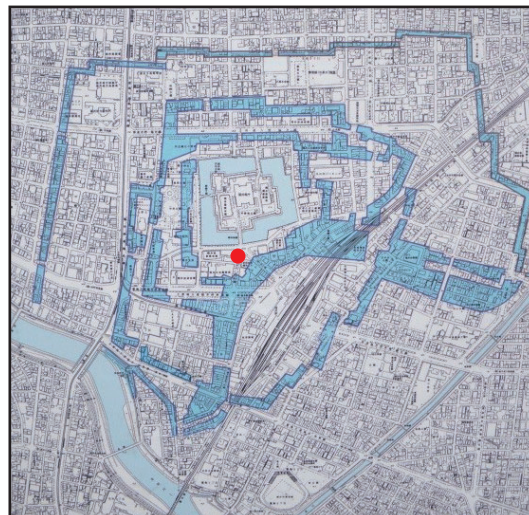
調査の概要 発掘調査は、市街地再開発事業地の南東の一角で建物解体後に実施しました。この場所は福井城内のうち百間堀に面した場所にあたり、堀石垣が出土すると想定できます。これまでに福井県教育庁が「中央大通り」で福井駅西口地下駐車場整備、福井市教育委員会が中央1丁目10番地で民間開発の発掘調査を行い、堀石垣を確認しています。

今回の調査地は両発掘調査地の間にありますが、福井城絵図では、百間堀に面するところは湾曲しており、堀石垣の位置を正確に求めることはできません。そのため、今回の発掘調査では、堀石垣の位置を確認することを目的としました。

遺構 堀石垣や江戸時代の遺構および遺構は確認できませんでした。土層堆積状況では、現地地面より0.7m下で近代の整地土、1.9m下で福井城築城に伴う造成土、2.1m下で築城以前の自然堆積土となります。福井城の造成土は約0.2mと薄い堆積であるが、この土層が見つかったことにより、調査地は堀内に該当せず、曲輪内にあたることを確認しました。各層とも堀側(西)に向かうにしたがい下る傾向にあります。

遺物 近代の整地土で、食器の破片や古銭が出土しています。

まとめ 今回の調査地に堀石垣が位置しないことを確認しました。(三澤繁忠)



位置図 (S=1/50,000)



調査地推定位置図



写真1 調査地風景



写真2 調査風景

8. 福井城跡

所在地：福井市手寄1丁目

調査原因：北陸新幹線福井駅（東口）拡張施設整備事業

調査期間：令和2年6月15日～同年8月21日

調査主体：福井市教育委員会

調査面積：600㎡

時代：近世

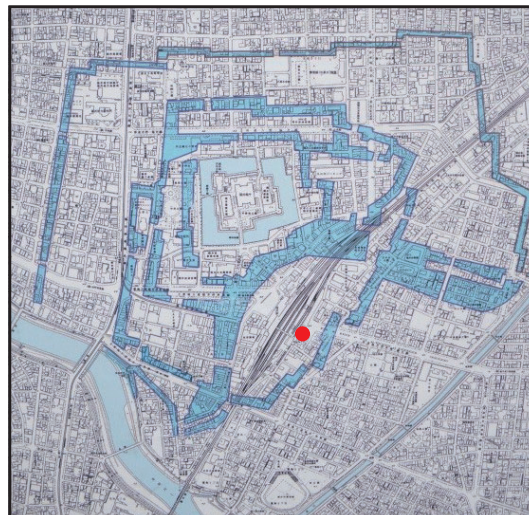
調査の概要 調査地は、えちぜん鉄道福井駅の南側の場所です。この付近は福井駅前にあった百間堀の東に位置する曲輪で、当時、武家屋敷が建ち並ぶ一帯でした。福井駅周辺では、区画整理などに伴う発掘調査が行われています。これらの成果や絵図を参考にすると、調査地は曲輪の中央やや東に位置する南北向きの道及び道に面した武家屋敷地の正面にあたります。

調査は、東口と福井駅を繋ぐ通路を境に北と南にわけて実施しました。

遺構 今の地面より約60cm下で江戸時代の道跡が見つかりました。南北方向（今の鉄道高架に沿う）に延び、幅約5mを測るもので、路面に砂利が敷かれていました。この道跡より西側（駅側）が屋敷地となります。屋敷地内では、道端より約2m離れた場所で道に沿って延びる溝跡内に並ぶ柱穴のほか井戸跡や池跡がありました。

遺物 遺物量が大変少ない上に、灯明皿や陶磁器の小破片ばかりが江戸時代の整地土内から出土しています。

まとめ 今回の調査では、道に沿って延びる溝が柱を伴う建物の基礎にあたると考えられます。これまでに道際の建物の存在を知る資料は少なく、屋敷の構造をうかがい知る貴重な発見となりました。（三澤繁忠）



位置図 (S=1/50,000)



写真1 屋敷内状況（北側調査地）



写真2 屋敷内状況（南側調査地）

くつみいせき 9. 沓見遺跡

所在地：敦賀市沓見

調査原因：ほ場整備

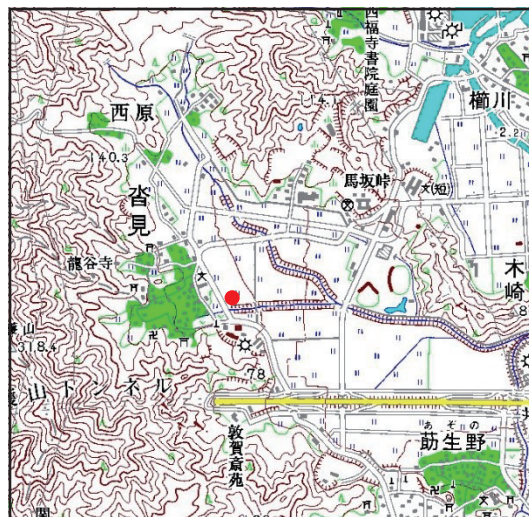
調査期間：令和2年5月1日～令和2年8月31日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：6,200 m²

時代：弥生時代・古墳時代・平安時代・

室町時代・江戸時代



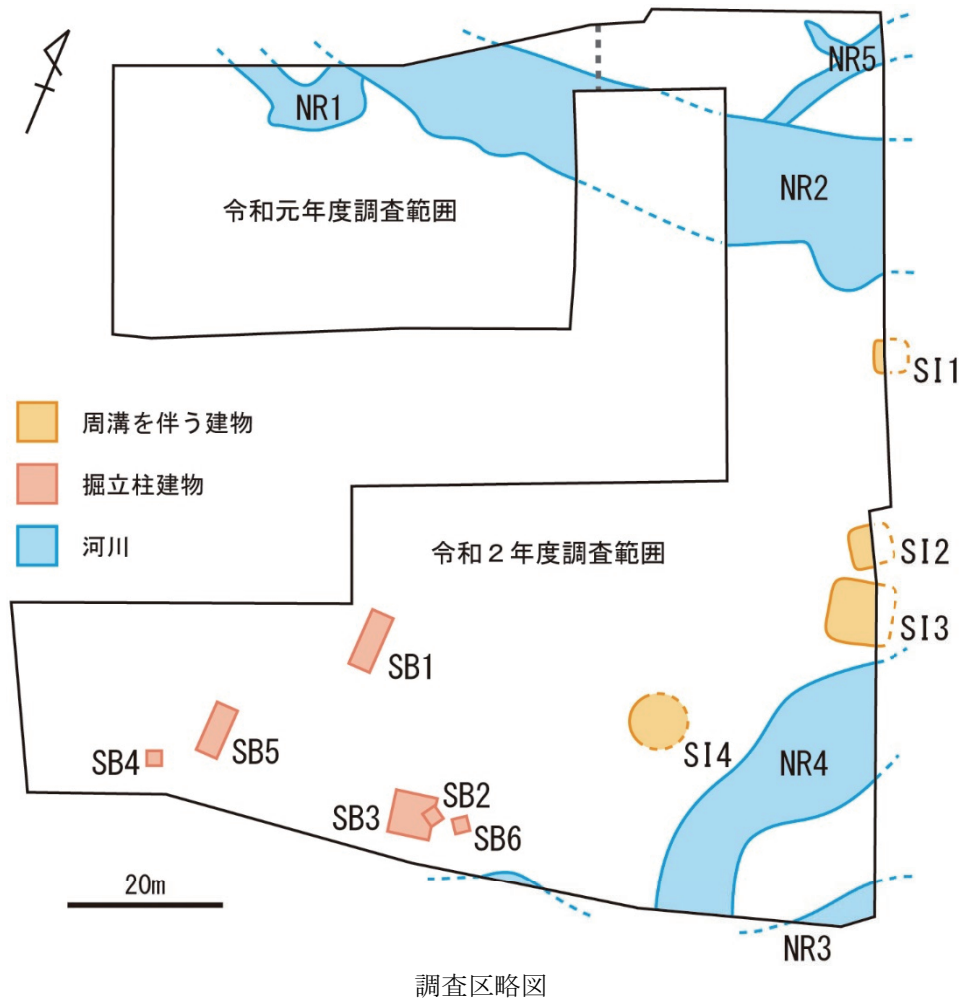
位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 遺跡は敦賀平野の西端に位置し、西側の山地から川によって運ばれた礫や砂の堆積によって形成された扇状地上に立地します。発掘調査は令和元・2年度に実施し、令和元年度の発掘調査では平安時代および江戸時代以降の河川を確認していました。今回の発掘調査では、前年度に確認した河川の延長部分や集落の確認を主な目的として実施しました。

遺構 周溝を伴う建物4棟 (SI 1～4)、掘立柱建物6棟 (SB 1～6)、河川4条 (NR 2～5)を確認しました。周溝を伴う建物は、弥生時代後期から古墳時代の住居です。複数棟の建物が調査区東側にまとまって立地していることや壺などの生活道具がこれらの遺構から出土したことから、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落と考えています。また、NR 3～5も同じ時期の河川ですが、河川から出土した古墳時代の土器の多くは、上流から流れてきて散らばった破片の状態で出土したほか、周溝を伴う建物群の範囲は調査区外東方へ広がっています。このことから、当時の集落は後世の削平によって一部失われたものの、実際の集落の範囲は東西方向へさらに広がっていたと想定しています。掘立柱建物は平安時代の建物とみられ、建物が調査区西側に複数まとまって立地していることから、平安時代の集落と考えています。

遺物 出土した遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・陶磁器があります。弥生土器や古墳時代の土師器には、甕・壺・高坏・器台など様々な種類があります。古墳時代の須恵器は5世紀中頃のものが多く、大阪府の陶邑古窯跡群などで生産された須恵器がこの地域に運ばれたものと考えています。平安時代の遺物には、須恵器の甕や坏 (9世紀)、灰釉陶器の壺・碗やロクロ成形の土師器皿 (10～11世紀)があります。

まとめ 敦賀平野西部で弥生時代から古墳時代の集落を実際に確認できたことは発掘調査の大きな成果です。弥生時代から続く集落がいくつか発掘されている敦賀平野東部に対して、平野西部の律令期以前の状況は明らかではありませんでしたが、住居や生活道具 (高坏・壺など)の確認によって、平野西部における当時の集落景観の一端を明らかにすることができました。また、古墳時代中期に貴重品として扱われていた須恵器が出土したことは、有力な豪族が本遺跡近辺にいた可能性を示しています。 (松本泰典)



SI 3 (周溝を伴う建物)



SB 3 (掘立柱建物)



NR 5 (河川) から土器が出土した様子

くもんみょうまつのきかいどういせき 10. 公文名松ノ木海道遺跡

所在地：敦賀市公文名 22 号松ノ木海道 13 番 1

調査原因：集合住宅新築工事

調査期間：令和 3 年 1 月 14 日～令和 3 年 2 月 26 日

調査主体：敦賀市教育委員会

調査面積：230 m²

時代：奈良・平安時代



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 公文名遺跡は古墳時代～平安時代の散布地として、福井県の遺跡地図に登録されている遺跡で、北側には公文名北遺跡が接して位置しています。今回の調査地は公文名遺跡の上端であり、集合住宅の基礎範囲を中心に調査を行いました。土地の調査前の履歴は宅地造成地、畑地であり、約 30 cm の客土が畑の作土の上に堆積していました。調査の結果、竪穴式建物跡 6 棟、平地式住居跡 1 棟、掘立柱建物跡 2 棟が見つかりました。

遺構 調査区西に 2 棟、東に 2 棟、北に 1 棟、南に 1 棟の計 6 棟の竪穴式住居 (SI01～06) が発見され、このうち 2 棟の竪穴式建物 (SI02、SI03) からかまどが見つっています。調査区のなかで竪穴式建物の全貌を捉えた遺構はありませんでしたが、推定規模 5～6m 四方の正方形を呈していたと考えられます。掘立柱建物は竪穴式建物よりも後に建てられていて、柱の規模から、建物は一般的な (農民など) の住居ではなく、公的な施設だった可能性が窺えます。また調査区南側中央には平地式住居跡が検出されており、壁板とそれを支える杭が刺さっていた跡が見つっています (SI07)。この建物は竪穴式建物や掘立柱建物よりも前の時期に平地式住居も建てられたようです。



図 1 遺構のようす (北東から)

調査区南側中央には平地式住居跡が検出されており、壁板とそれを支える杭が刺さっていた跡が見つっています (SI07)。この建物は竪穴式建物や掘立柱建物よりも前の時期に平地式住居も建てられたようです。

遺物 注目すべき遺物は、竪穴式住居内 (SI03) で発見された皿形の赤彩土師器と、すずりです。破片も含めると、赤彩土師器は約 20 点出土しました。赤彩土師器は 7 世紀後半から 8 世紀後半の時期に都の役所で使用された食器を模したものです。律令制度が地方でも整ってくると都と同様の祭祀を地方でも行うようになり、そのときに使用する食器として、都の土師器を忠実に模倣した赤彩土師器がそれぞれの地方でも特別に製作されました。赤彩土師器はこのように特別な時に使用するものであったため、遺跡から出土するものは少量かつ破片であることが多いのですが、公文名松ノ木海道遺跡では竪穴式建物内から完形の赤彩土師

器（皿）3点が見つかり、そのうち1点は建物床面に掘られた穴から蓋がかぶせられた状態で発見されました（図2）。この蓋つきの皿は意図的に埋納されたことが予想されます。土師器の埋納例は全国各地に存在しており埋納の明確な理由は不明ですが、この建物が特別な施設であり、それを遺棄する際の地鎮のためだったのかもしれませんが。

すずりは「円面硯」と呼ばれる特徴的な脚部を持つすずりの破片（図3）と、食器として製作された須恵器の蓋をすずりに転用して使用されたもの（転用硯）が出土しました（図4）。すずりの出土はここに文字を書ける人がいたことを示し、また刀子や砥石、鉄滓など鍛冶工房に関連する遺物も出土していることから、この遺跡が工房の一部であり、さらには工房・記録を管理するような人物がいた可能性があります。



図2 赤彩土師器（右：皿、左：出土時の様子）



図3 円面硯（破片）



図4 転用硯と鉄滓

まとめ 遺構の規模や遺物の内容を総合して検討すると、公文名遺跡松ノ木海道遺跡は、規模の大きな建物遺構、建物床に埋納された赤彩土師器、円面硯などいずれも一般的な集落遺跡にはない性格を持った遺跡だと言えます。墨書土器など遺跡の性格を明確に位置づける遺物が検出されていないため、推測の域はできませんが今回の調査地区は平安時代の鍛冶工房とそれに伴う管理記録施設が存在した場所ではないかと考えられます。（笠原朋与）

こぜんないせき 11. 高善庵遺跡

所在地：三方郡美浜町興道寺

調査原因：内容確認

調査期間：令和3年1月31日～3月18日

調査主体：美浜町教育委員会

調査面積：35.6 m²

時代：不明（古代か）



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 美浜町興道寺の小字高善庵では昭和12年(1937)頃に焼きひずんだ古瓦の採集があり、旧弥美小学校西分校の付近に瓦窯の存在が想定されてきました。平成15年度・平成30年度・令和元年度に山裾の一部で部分的な発掘調査を行い、平安時代後期から中世初期、およそ11～12世紀に伴う大規模な土地造成(盛土)の痕跡が確認され、多くの土師器皿などが出土しました。また、それ以前の時代の井戸跡、柱穴列なども検出され、山林寺院などの宗教施設か、あるいは祭祀・宗教行為が行われた場所である可能性が浮上しました。

旧地形は東に向かって緩やかに傾斜しますが、現在は高低差のある2段の平坦面をもつ地形です。さらなる遺跡の広がりを確認するために、それぞれの平坦面を東西に縦断するように調査区を設け、2か所で発掘調査を行いました。高善庵遺跡の第4次調査にあたります。

遺構 1トレンチでは、表土、堆積層下の地山面で地床炉と考えられる土坑1基、小穴1基を検出しました。地山面に掘り込まれた攪乱が多く検出されています。土坑SK040101の平面形態は楕円形で、東西1.08m、南北0.84m、深さ0.2m。埋土には灰や酸化した土壌が混じり、土坑の周縁部は部分的な鉄化が認められるなど鍛冶炉と考えられます。

2トレンチでは、表土、堆積層下の地山面で土取り坑と考えられる土坑1基を検出しました。地山面に掘り込まれた攪乱が検出されています。土坑SK040201の平面形態は崩れた円形で、東西検出長2.1m、南北検出長1.38m、深さ0.72mと大規模で、地山層の粘土を採掘するための土取り坑と考えられます。

遺物 若干の土器片が出土しました。

まとめ 今回の発掘調査では古代に属する鍛冶炉と考えられる土坑1基を確認しました。既往の調査で井戸跡、柱穴列などが確認されていますが、高善庵遺跡の全体像があきらかになりつつあります。

今回の調査でも瓦窯は発見できませんでした。しかし、調査地の南に隣接する旧弥美小学校西分校の背後、西側の山裾で近現代のごみなどととも古代瓦30点ほどが散在する状況や、瓦が混じる盛土が確認されました。付近に損壊を受けた瓦窯あるいは灰原が存在する可能性があります。また、この地点から西に10mほどの山裾でも瓦片数点を採集し、また斜面で須恵器片2点を採集しました。複数の瓦(陶)窯が存在する可能性が高まりました(松葉竜司)。

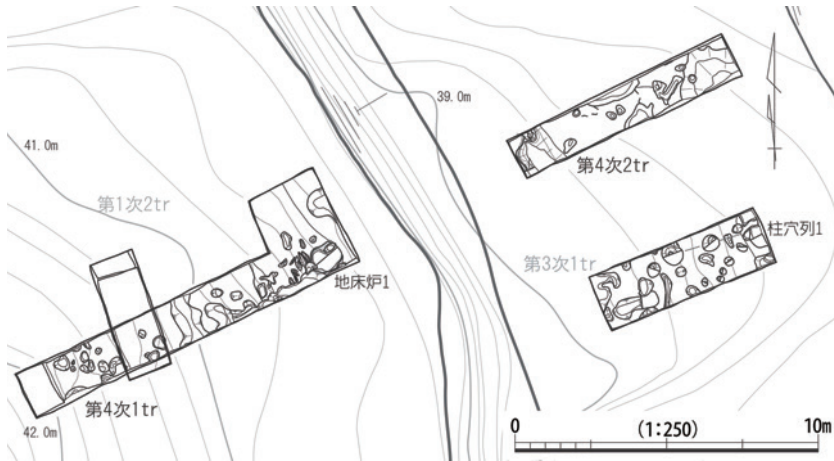


図1 高善庵遺跡第4次調査 平面図

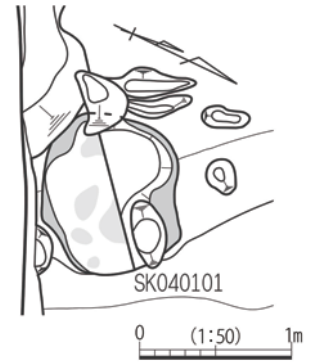


図2 地床炉1 平面図



写真1 第4次調査地近景 (東から撮影)



写真2 1トレンチ (西から撮影)



写真3 1トレンチ土坑 SK040101 (東から撮影)



写真4 2トレンチ (西から撮影)



写真5 2トレンチ土坑 SK040101 (東から撮影)



写真6 瓦散布地近景 (東から撮影)

にしづかこふん 12. 西塚古墳

所在地：若狭町脇袋

調査原因：史跡整備にともなう範囲確認調査

調査期間：令和2年10月5日～12月28日

調査主体：若狭町歴史文化課

調査面積：126 m²

時代：古墳時代



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 西塚古墳は、古墳時代中期後半の全長74mの前方後円墳です。大正5年(1916)に現在のJR小浜線の敷設工事にともなう土取りで、墳丘の大半が削平されました。しかし、その土取りの際に後円部から横穴式石室が露出し、多種多様な副葬品が発見され、その後、西塚古墳は昭和10年(1935)12月24日に国指定史跡となりました。今回の発掘調査は、西塚古墳の復元整備にともなう史跡範囲の再指定を目的とした範囲確認調査です。調査にあたり、計6か所の調査区を設定しました。発掘調査の結果、北陸地方最古級の人物埴輪及び馬形埴輪や各種遺構を確認しました。

遺構 西塚古墳の前方部前端裾・前方部東側裾・後円部裾及び基底石・周濠斜面を確認しました。

そして、6調査区から、本発掘調査で初めて陸橋状の遺構を一部確認しました。幅は約1m20cmで、検出した位置から勘案するために水位を調整するために作られた遺構の可能性が高いです。

遺物 西塚古墳からは、円筒埴輪をはじめ朝顔形埴輪、家形埴輪といった埴輪が出土しており、これらの埴輪は過去の調査でも出土しています。さらに、本発掘調査で新たに人物埴輪と馬形埴輪が出土しました。北陸地方において、この時期に属する人物埴輪と馬形埴輪は発見されておらず、最古級の埴輪です。

人物埴輪と馬形埴輪は、2調査区から出土しました。出土状況から周濠の外側から一気に転落したと考えられます。つまり、周濠の外側に人物埴輪や馬形埴輪などの形象埴輪が樹立していたと考えられます。

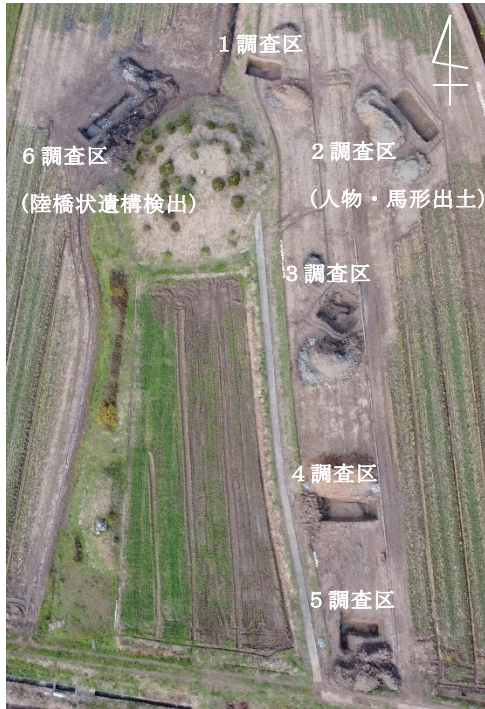
まとめ 発掘調査から、西塚古墳の新たな姿を窺い知ることができました。まずは、2調査区から出土した人物埴輪と馬形埴輪です。両埴輪の出土状況から周濠の外側に人物埴輪や馬形埴輪などの形象埴輪が樹立する区域が存在していた可能性が高いです。もし、このような区域が発見されれば北陸地方では初めての事例となります。

そして、陸橋状遺構の発見です。この遺構は水位調節用の遺構と考えられ、東側から西側にかけて傾斜する立地に築かれた西塚古墳の排水処理の工夫を指摘できる貴重な発見です。

(近藤 匠)



脇袋古墳群 空中写真(北西から)



西塚古墳 垂直写真



円筒埴輪出土状況(3 卜調査区)



陸橋状遺構検出状況(6 調査区)



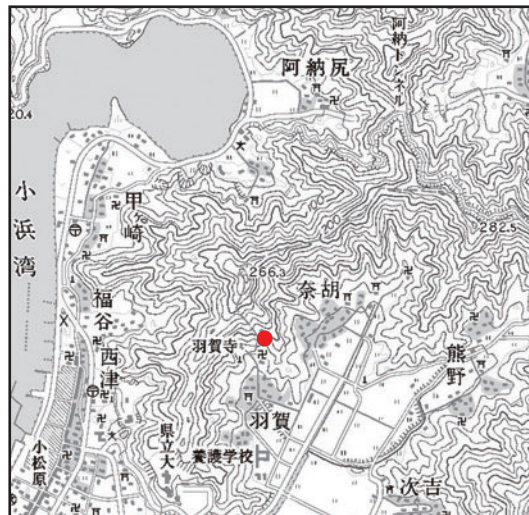
人物埴輪



馬形埴輪

はがじ 13. 羽賀寺

所在地：小浜市羽賀
調査原因：通常砂防工事 代谷川（徳蔵坊谷川）
調査期間：令和2年5月～9月
調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査面積：650㎡
時代：中世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 羽賀寺は小浜市の中央部、天ヶ城山の南西斜面に開いた谷にある寺院です（写真1）。奈良時代の高僧、行基によって霊亀2年（716年）に創建されたと伝わる古刹で、中世には時の有力者たちによって再建や修理が行なわれるなど、古くから信仰を集めてきました。今に残る古代につくられた本尊の木造十一面観音立像や中世に再建された本堂など、多くの絵画や彫刻、歴史資料、典籍、書跡が国や県の指定文化財に指定されています。

この羽賀寺の一角で砂防工事が計画されたため、令和2年度から令和3年度にかけて、工事に先立ち発掘調査を行うこととなりました。今回報告するのはこのうち、令和2年度に行った調査の成果です。



写真1 調査地遠景（南から）

遺構 発掘調査をした場所は、現在の羽賀寺開山堂の裏、本堂や開山堂のある谷筋から分かれた小さな谷にあります。調査の前から、この谷の底には谷奥から順に上中下と3段の平坦面が残っていて、ほかにも、谷の側面の斜面に小さな平坦面がいくつか確認できました。昨年度の調査範囲は、谷底の平坦面のうち、一番下と真ん中、それと一番上の平坦面の一部に当たります（写真2）。

地面を掘って地層の断面を観察したところ、地表の土のすぐ下に昔の盛り土が1～3層ほど盛られていました。遺構は、場所にもよりますが、地表の土のすぐ下に当たる一番上の盛り土層の上の面と、その層の下の面から見つかっています。時期は中世以降です。

盛り土の下の方では、一番上の平坦面と真ん中の平坦面との間の斜面で土留めのような石の列が見つかりました（写真3）。このほか、真ん中の平坦面では、砂利敷き（写真4）、石の列、溝、越前焼のかめを据えた穴（写真5）などが見つかっています。

上の面には、一番上の平坦面の縁に石の集中がありました。このほか、一番上の平坦面と真ん中の平坦面との間の斜面で石の列が、真ん中の平坦面では石の集中や穴が見つかっています。

遺物 遺物は主に盛り土や地表の土の中から見つかりました。主なものとしては、土師皿と呼ばれる素焼きの小さな皿や、瓦質土器と呼ばれる瓦に似た黒い土器で作った火鉢、陶磁器の碗やすり鉢、石塔の一種である五輪塔の一部などがあります。いずれも中世以降のものです。

まとめ 昨年度の調査では中世以降の石の列や砂利敷き、盛り土などの遺構や遺物が見つかり、谷を造成して利用していたことが分かりました。今年度の調査では、遺構の続きが見つかることが期待されます。（野路昌嗣）



写真2 調査区全景（南西から）



写真3 斜面の石の列（南から）



写真4 砂利敷き（北西から）



写真5 越前焼のかめを据えた穴（南から）

おばまじょうあと 14. 小浜城跡

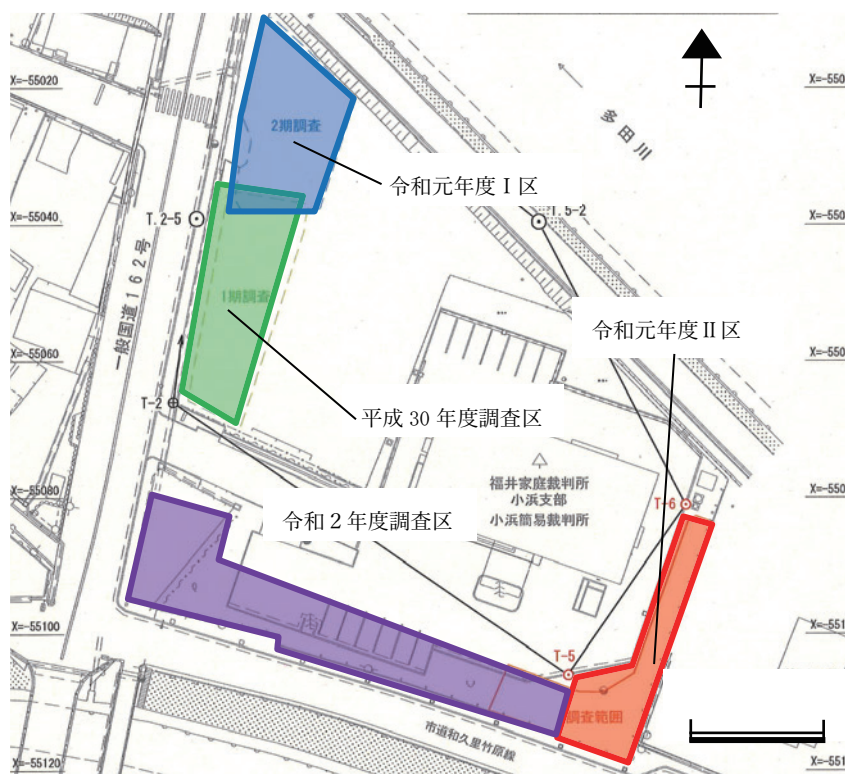
所在地：小浜市城内1丁目
 調査原因：一般国道162号道路改良事業
 調査期間：令和2年6月1日～12月28日
 調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 調査面積：660㎡
 時代：江戸時代



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 小浜城は、北川・多田川と南川の河口に挟まれた三角洲に築かれた江戸時代の城です。慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦後、小浜藩初代藩主である京極高次によって、後瀬山(のちせやま)城から雲浜(うんぴん)の地に、拠点に移され築城を開始しました。小浜城は京極氏の時代には完成しませんでした。京極氏の後に小浜藩主となった酒井忠勝によって完成しました。明治維新まで酒井氏によって修理・維持されてきましたが、明治初期の火事や天守の解体などにより小浜城の大部分は失われました。現在は、本丸跡に酒井忠勝を祀る小浜神社が建っています。

このたび、国道162号改良工事に伴い記録保存を目的とした発掘調査を行いました。これ

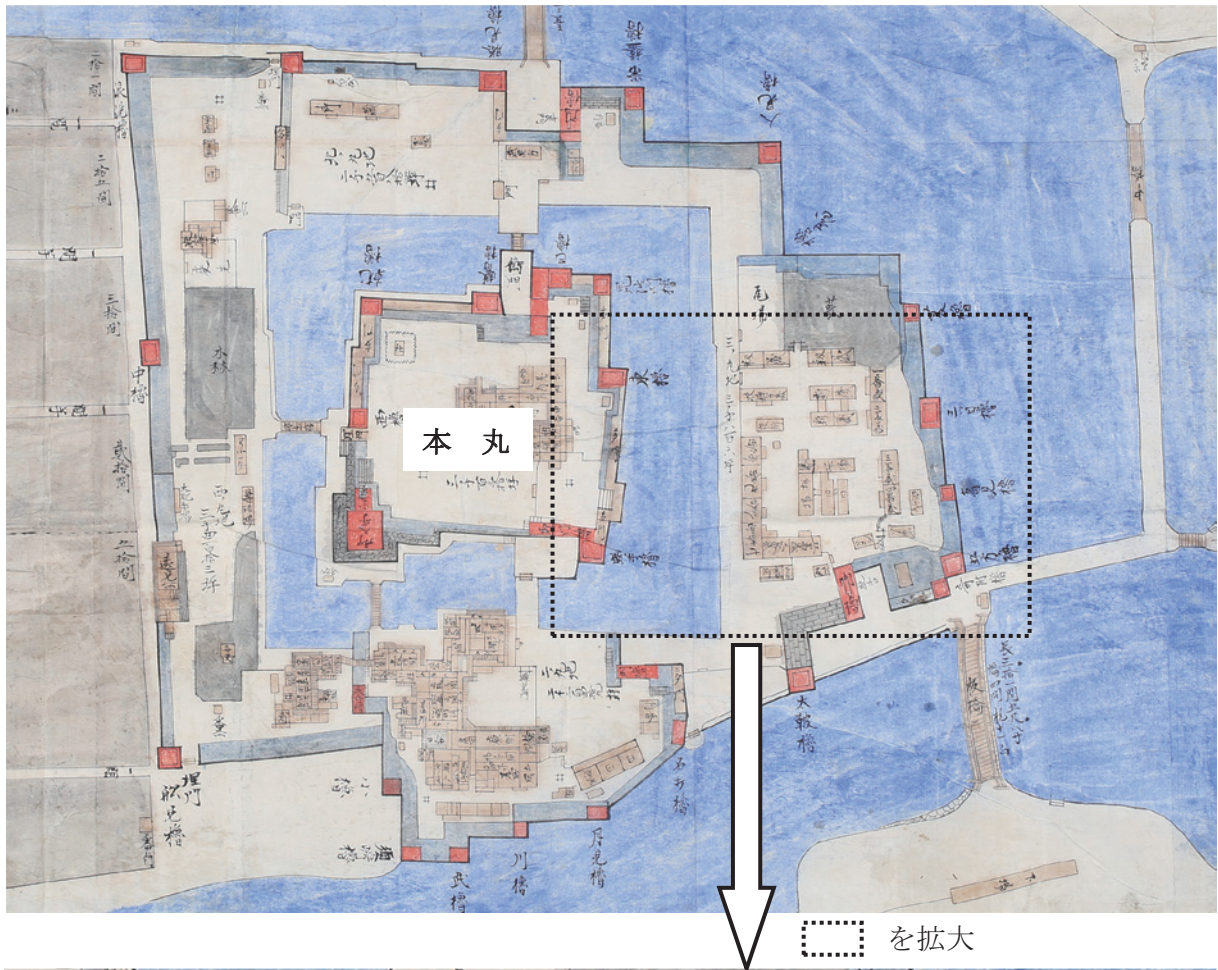


調査区位置図 (縮尺約1/1,100)

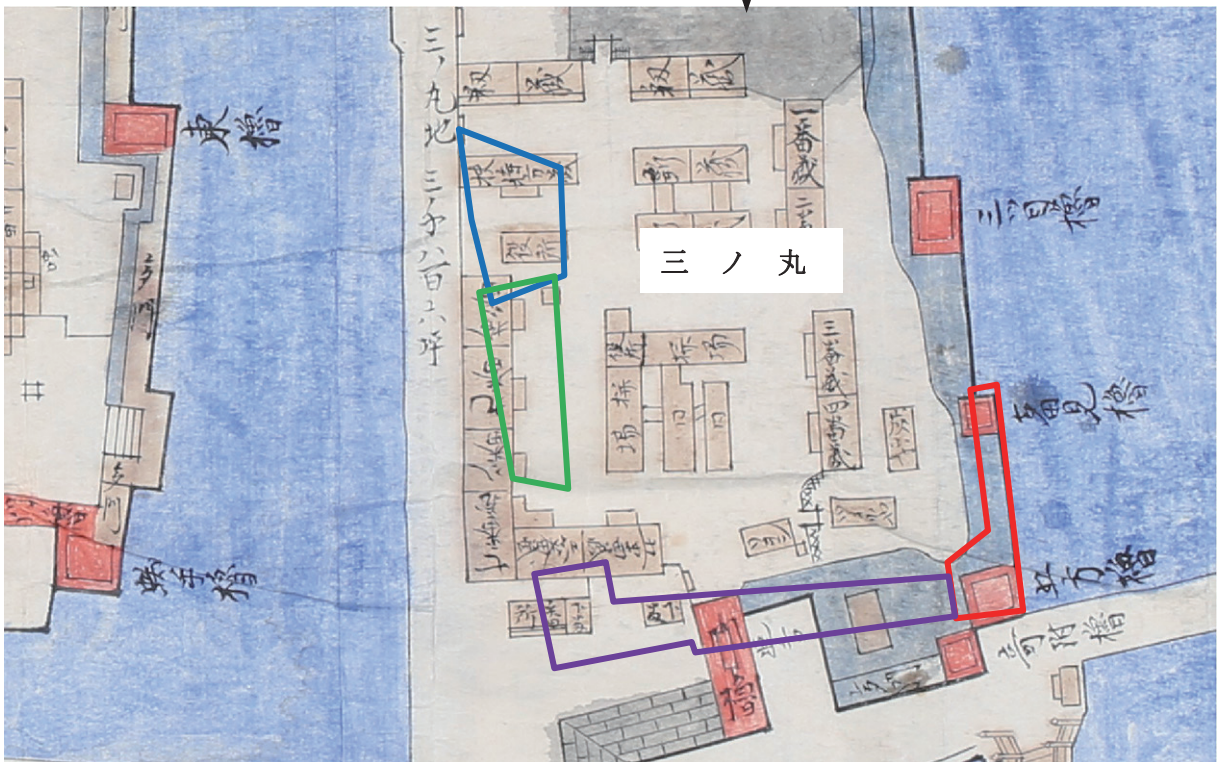
に伴う発掘調査は平成30年度より開始しており、今年度は3年目にあたります。江戸時代後期の小浜城絵図によると、調査した場所は三ノ丸に該当し、米蔵や粃蔵および関連する役所が描かれています。

これまでの調査では、蔵の基礎の石垣と各蔵の出入口となる張出しや、蔵の造営によって破壊された石垣、三ノ丸外堀石垣などを確認しました。

令和2年度は裁判所の敷地内を調査しました。



を拡大



※ 調査範囲は調査区位置図と対応させている。

小浜城絵図（一部改変）福井県立若狭歴史博物館所蔵

遺構 令和2年度の調査区は、東西約65m、南北約8～14mを範囲とする。調査の都合上、調査区を2つにわけて調査しました。遺構は、三ノ丸石垣と大手門、米蔵石垣、石列を伴う建物基礎を確認しました。

三ノ丸石垣は、調査区のほぼ中央部にて確認しました。上方はすでに破壊されており、下方のみ残っていました。検出した石垣は、南北約5m、東西約15m、高さ約2mを測ります。石垣が築かれたのは外側のみであり、内側は砂で盛土するのみです。石垣は、道路を境として石の使い分けが行われており、人目に付く上部には花崗岩、人目につかない下部には花崗岩以外の石が使われていました。小浜城は川に挟まれた地盤の弱い三角洲に立地しているのにもかかわらず、石垣の石の下に桐木(石垣の石が自らの重さで沈まないようにするために、石の下に置かれた木)を確認することはできませんでした。

石垣には2ヶ所の折れた部分があり、外側に折れた部分と内側に折れた部分があります。外側に折れた部分の脇に大手門に伴う2ヶ所の礎石と石列を確認しました。礎石と石列は、いずれも花崗岩で、矢穴痕を認めることから、石垣に用いる石を使ったものと考えています。なお、石列の石には墨で文字が書かれていました。何と書かれているのかは不明であり、今後、調べる必要があります。



三ノ丸石垣と大手門



大手門の墨書



三ノ丸石垣



石垣隅角部



三ノ丸石垣立面 (オルソ画像)

米蔵石垣は、調査区の北端にて確認しました。東西約7m、高さ約1mを測ります。江戸時代の石垣は2段積みされています。上は明治時代に積み直されていますが、江戸時代の石垣は良く残っていました。石垣のほとんどは、令和2年度の調査区の外に広がっており、令和3年度の調査区は、米蔵基礎部分に相当するものと思います。

石列を伴う建物基礎は、調査区の中央やや西端にて確認しました。三ノ丸石垣の近くです。2方向の石列で挟まれた部分に砂と粘土で盛土されています。東西約3m、南北約2mを測ります。礎石と思われる石も1ヶ所確認しました。使われている石のほとんどは花崗岩です。明治時代に手が加えられた部分には、花崗岩以外の石が使われています。

絵図に該当する場所に建物が描かれており、番所の建物の基礎と考えています。

三ノ丸石垣と大手門は京極氏期、米蔵石垣と石列を伴う建物基礎は酒井氏期のものと考えています。



米蔵石垣



石列を伴う建物基礎



小浜城跡遠景

遺物 遺物は江戸時代のものが大半で、瓦と陶磁器が出土しました。瓦が多いです。瓦は、いぶし瓦と赤瓦があります。また織部や志野といった陶器が出土しています。これらの陶器は、三ノ丸石垣の造られた時代（1600年代初め）に流行していたものです。出土量は天箱で67箱あります。

まとめ 小浜城は京極家によって造られ、酒井家によって完成しています。現在、地表に残る小浜城跡の石垣は酒井家の時代のものです。発掘調査の結果、地下には京極家の時代に造られた石垣が良好に残っていることが確認でき、小浜城跡の歴史を考えるうえで、重要な成果を上げることができました。

今年度も発掘調査は引き続いて行っています。小浜城跡の姿はますます明らかになっていくことでしょう。

(中島啓太)

いしやまじょうあと 15. 石山城跡

所在地：大飯郡おおい町石山地係

調査原因：範囲確認調査

調査期間：令和3年4月6日～令和3年3月31日

調査主体：おおい町教育委員会

調査面積：330 m²

時代：中世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 石山城跡は、石山集落背後の標高190mの山上に展開する山城です。主郭からは佐分利川上・中流域一帯を一望でき、県道小浜綾部線と県道坂本高浜線が交差し、この地域を支配するうえで重要な場所に城が築かれています。本城を居城とし、佐分利一帯を治めていたのは若狭武田氏家臣である武藤氏でした。本調査は、石山城跡の保存活用と将来的な整備の可能性を探ることを目的とし、令和2年度で2年目の調査となります。令和2年度は遺跡の範囲確認と、主郭及び主郭に隣接する郭、最も南側に位置する郭の確認調査を行いました。

遺構 主郭は南北長約30m、東西幅最大14.7mを測り、南側から約15mのあたりで北東方向に少し屈曲しています。調査前から礎石が数ヶ所露出しており、表土面下からも礎石を検出しました。礎石の大きさは30～40cmを測ります。全面的な調査ではないため現時点で建物の規模など明らかではありませんが、主郭全域に礎石が置かれている可能性があります。

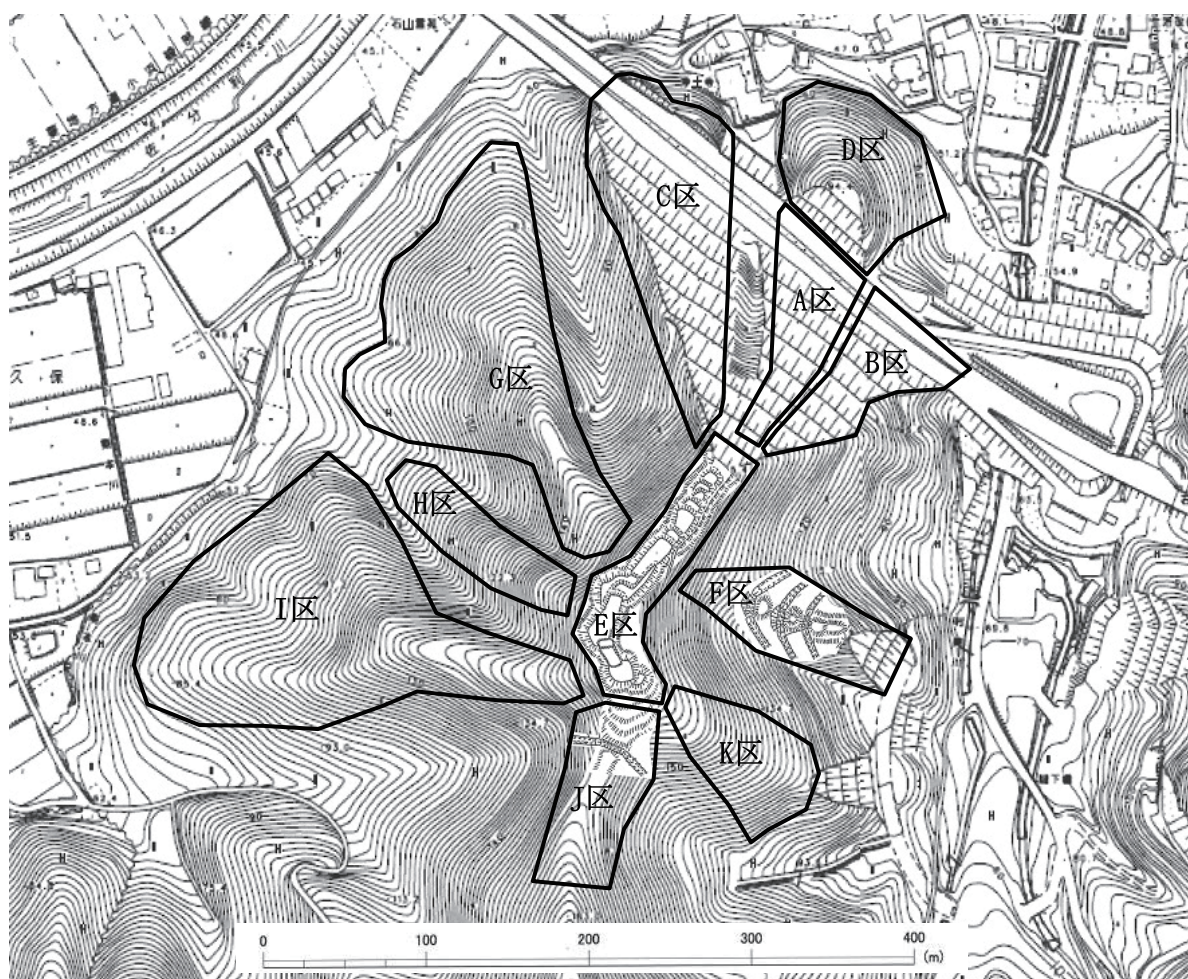
主郭の南側に隣接し、石山城跡の中で最も高所に位置する郭は、南北長約9.8m、東西幅最大8.6mを測ります。表土面下から礎石を検出し、南北に3間から4間、東西に3間から4間の建物が存在したと推測されます。礎石は50～70cmと主郭の礎石よりも大きく、主郭とは性格の異なる建物が建っていたのではないかと考えられます。

最も南側に位置する郭（南郭と呼称）は、南北長約13m、東西幅最大15mを測ります。郭北側を中心に表土面下から礎石を検出し、南北に2間から3間、東西に3間から4間の建物が存在したと推測されます。西端では大きな石を使用した石列を検出、郭の端を意識したものと思われませんが、南・東端では石列が検出されなかったため、その用途は判然としません。この石列付近に直径約1m、深さ約50cmの穴があり、その周辺から甕片が出土していることから、甕を埋め、水甕として使用したと推測されます。南東隅からはコの字状の石組を検出し、その中央に炭化物がみられることから竈と推測され、石組の周囲には扁平な石が4ヶ所配置されており、竈の覆屋ではないかと考えられます。

遺物 主郭からはカワラケの小片と甕と思われる土器片が数点出土しています。南郭からは染付椀または皿の小片、甕片、カワラケの小片などが出土しており、概ね16世紀初頭に相当すると思われれます。主郭に隣接する南側の郭からは遺物の出土はありませんでした。

まとめ 南郭は、礎石や竈と考えられる遺構、出土遺物の内容から戦時に立て籠もるとい
うよりも居住空間としての性格がうかがえます。

文献における破却されたとの記述や、礎石を抜き取り持ち帰ったという地元の話から、礎
石など遺構の性格を示す痕跡は残っていないのではないかと想定していましたが、調査によ
って比較的良好に残されていることが判明しました。今後の調査で規模や性格などがわかっ
てくるものと思います。(川嶋清人)



石山城跡調査区（令和2年度調査区/E区）



主郭 礎石列



南郭 礎石建物跡

第 36 回 福井県発掘調査報告会資料

— 令和 2 年度に発掘調査された遺跡 —

令和 3 年 6 月 29 日印刷

令和 3 年 7 月 3 日発行

発 行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター